

るとともに尚お将来の御指導御交誼を賜らんことを願うする次第なり、冀くば御芳伝賜らば幸之にすぎず。尚お自分の推薦により入店したる田中四郎、太宰正己、三木秀次、松岡福吉、渡辺昭等は全然自分に関係なく永久にお店のために働くよう申しおきたれば御同情の上特別の御引立たまわらんとを願ひ奉る。

(昭和二年三月十七日夜、摩耶山の晩鐘を悲痛に聞きつ、

鉄材課 久 琢磨)

僕はこの年店はやめる、長女には大病に罹られるの大厄で悲観のどん底に陥いついてた、しかし人間万事塞翁の馬とやらで、その夏大先輩石井光次郎先生のお蔭で東京朝日新聞社に入社し、昭和六年には抜擢されて年令僅か三十五才で大阪朝日の庶務部長になり、その恩義に感じて粉骨砕心働いた、しかしこの朝日も昭和十九年に退かざるを得なくなつてまた元の古巣の鈴木系の神戸製鋼所に帰った。僕は最初に述べたように進退を重んずること人一倍強いと自覚しているので朝日を辞するに当つてもその進退を明らかにしたかつたが、

これを明らかにすると社長以下重役の面目にかゝるようになるので本意ならずも無言で退社した。今でも何故やめたかと不審がる友人もいるほど僕の退社は？ であつた。しかしそれから既に二拾年

神戸の消防史異聞

神戸米騒動記

■大正七年の熱い夏

「市中の半鐘はジャンジャン鳴り出した。それは爽快な景物にそえる音楽のようでもあつた。

消防隊が四方から駆けつけてきたが、一滴の水も筒先から出ずことは出来なかつた。

消火栓には抜刀した男がさえぎつて寄りつくことは出来なかつた。やつと一本、遠くの個所から水を

通すことが出来たが、これも瞬く間に誰かがそのホースを途中で切つたので水は無益な地面に流れていくだけであつた。

「黒い米(武田芳一)のじごく文庫」の「神戸の米騒動」を背景にした鈴木商店焼打ちのシーンである。

六十一年前、一九一八年(大正

と経過し何事も時効にかかつたし僕も棺に入る前にはこのことだけは明らかにしておきたい、幸に同級会誌なら許してくれると思うから次の号で「朝日を辞めた真相」を明らかにしたいと会願している。

七年)七月の「越中女一揆」が発端で、およそ五十日余にわたつて全国六百か所で、工場労働者、農民など、低所得者層など百万人を越える人々が、ある所では軍隊・警察の血の弾圧とはげしくたたかいながら、支配階級をふるえあがらせた未曾有の大衆暴動、それが米騒動である。

一九一四年(大正三年)、第一次世界大戦が勃発し、日本の輸出はうなぎのぼりに増加し、重化学工業を中心にして工業生産は数年で二倍ちかくになり、成金という言葉ができたのもこのころである。

一方、国民大多数の生活はどうであつたろうか。繁栄の本源とされた連年の出超貿易、急激な設備投資、歳出の半分以上におよぶ軍

事費の支出、そのほか資本家の利益を手あつく保護した国家の財政措置などは、すべて人民の負担によつて行われ、はげしいインフレーションの物価上昇をひきおこした。(阿部真琴「兵庫米騒動記」)

■米騒動の直接原因

米騒動の直接原因について、前出の「兵庫米騒動記」は、次のように述べている。

「戦争下という事情があり、そこにインフレ政策、一般的に物価騰貴があつた。一中略一米の生産費が高くなり、一中略一資本主義の急激な発展とともに、米の消費は増大する。インフレの進行といふまて値上がりを見こした地主は米の隠匿をはじめ、米商人は買占めと投機に熱中した。

一方地主をバックにする政府は、外米輸入関税を固守し、輸入にあつた三井物産や鈴木商店に独占的にこれをおこなわせ、かれらに巨大な利益をあたえた。

一九一八年七月、日本はシベリア出兵を決定した。米価はいよいよあがつた。

一方、神戸の低所得者層の生活は、どうであつたろうか。

戦争景気で、工場労働者や港湾

労働者が各地からどつと流れこんだ。

前出の「兵庫米騒動記」では、

「このあいだに市民一般の生計費も異常に膨張した。

まず市の人口は、一九一四—一九一八年に四万五千から六万三千四千と四割ちかく増加し、それは労働者の増加とほぼ一致する。その中で寄留者は一七万五千から二万四千に増加し、ときめんに住宅不足と家賃引上げがおこつた。」

それでは、米価はどのように上がったのであろうか。

「一九一七年の五月ごろからじりじりあがりはじめ、一八年春からそれが急ピッチになり、夏には天井しらずの状態になつた。

これを、当時門司について全国二番目だつた神戸市の小売米価で見ると、まず年平均では一七年、石二五円四〇銭。

一八年、三九円五〇銭、一九年四八円四三銭であり、一八年七、八月には、赤三等(普通米)一升が七月二日三四銭五厘、一六日三六銭八厘、二四日三七銭九厘、八月一日四〇銭七厘、四日四三銭五厘、七日五五銭三厘、八日六〇銭八厘になつた。わずか一か月余で二倍弱になつたわけである。

これに対する労働者の平均賃金(日給)は

一九一七年男六十七銭女三十三銭一九一八年男九十二銭女四十八銭にすぎなかつた。だから、一七年はじめから労働者の賃上げ闘争が激化し、争議が続発していた。」

「兵庫米騒動記」

そして労働者の流入によつて、労働力の買手市場となつたことも見逃せない。

さて、一九一八年(大正七年)

八月十一日から始まつた神戸の米騒動は出兵した姫路第十師団の隊と警察によつて、十七日には鎮圧が確認された。

この暴動の最盛期の模様を、神戸新聞号外は、次のように伝えている。

■遂に流血を見る

暴徒四名刺し殺され、重軽傷者無慮数十名更に相生町の放火騒ぎと神戸の大暴動は、十三日夜に入りて遂に流血の惨を見るに至れり。則ち当夜十時過ぎ湯浅商店襲撃の途上、元町三丁目附近を警戒する一憲兵が暴民十数名のために胸上げにされ、危急の状態に陥りしかば、出動中の軍兵数名、現場に駆けつけ、これを救助せんと

したるに、日本刀を携へたる二三、四歳の一兇徒は、矢庭に抜刀して、軍隊に斬込み来りたるにぞ、軍隊側においても、防衛上反抗の余儀なきに至り、銃剣を該兇徒の胸部に擬して一突きたるも、容易に怯む色なく、尚ほも兇器を振り廻す狼籍に更に二突き挟りて脾腹を貫き遂にこれを即死せしめたり。

又これより先、有馬道筋三つ輪

牛店を襲はんとしたる一凶漢は、警戒中の一兵士に対し、

「見事突けるものなら突いて貰はう」

などと盛に厭がらせを言い、公務を妨碍すること一方ならざるより、これ亦兵士の携帯せる銃剣にて胸部を刺され、摂津病院に収容したるも程なく絶命せり。

尚ほこの他湯浅商店外一ヶ所に銃剣にかり死亡したるもの二名及び警官群集に数十名の重軽傷者を出したり。

而して十四日午前一時二十分となるや相生町四丁目種物商大井駒蔵方へ数名の暴徒乱入し、火を放ちて瞬く間に同家を全焼せしめたが、同夜は消防の手行届き居りし為め、被害は同家のみに止まりたるは幸ひにして犯人の一人は直

に相生橋署の手に逮捕されたり。

尚ほこれと相前後して兇徒は兵庫署、安養寺、湊川神社、共立検等を襲撃したるも、軍隊警官のため撃退せられたり。

(句読点以外原文のとおり)

(神戸新聞号外/大正七年八月十四日)

■米騒動と消防

「やい、日本樟脳に水かけたら(放水)承知せんぞ。」

かけつけた消防隊に対して、馬引消防ポンプ車の上に陣どり、抜き身を振り回す暴漢。

そして「類焼せんように民家に放水せよ」という。

当時、現場を見た日本画家・水谷吉晴さん(北区在住)の証言。ただし、水谷さんは、暴漢を壮士と表現しているが……。

この米騒動で放火された神戸市内の建物・損害等は、次頁のとおりである。

鈴木商店は、米の買占めをうられて群集に襲われたものだが、神戸製鋼も日本樟脳も鈴木さんの下であつた。兵神館は、家賃取り立て会社、不動産会社で、名前は変わっているが、今でも神戸市内

